『遠野物語』の教材化（2）

小山　清

一

明治四三年、聚精堂から刊行された柳田国男の『遠野物語』は、その序文の冒頭に、「此話はすべて遠野の人佐々木鏡石君より聞きたり。昨明治四十二年二月頃より始めて夜分折々訪ね来り此話をせられしを筆記せしなり。鏡石君は話上手には非ざれども誠実なる人なり。自分も亦一字一句をも加減せず感じたるまゝを書きたり。」とあるように、岩手県中部の遠野郷につたわる一一九の口碑を、ひびきの高い簡潔な文体でもって語っている。それは、桑原武夫が、岩波文庫版の解説の中で、「日本民俗学の門出をしるす美しい記念碑というべき『遠野物語』」と述べているとおりである。

すなわち、『遠野物語』に生き生きと描き出されているのは、自然との交渉を通してつみ重ねられてきた〃常民の心的世界〃にほかならない。色川大吉は、『遠野物語』の世界を、「一つは、各家々が肩を寄せあうようにして寄り合って暮らしている集落という人工的空間、もう一つは、人間の手の入らない人跡まれな山中のような、神や精霊や山人らが住んでいる神霊的空間、そして三は、その中間にある神と人との共生空間」（注1）と三つに分けているが、人間を超えたものに対して抱く畏怖畏敬の念こそ、『遠野物語』の中心と言えるであろう。

ところで、私は、いままでにどの教科書にも採録されたことのない『遠野物語』を、昭和五三年九月初めから一一月半ばにかけて、高等学校一年生の現代国語の教材として、取り扱ってみた。その直接の動機は全国高等学校国語教育連合会第一一回研究大会において、公開授業の試みとすることにあったが、それ以上に私を動かしていたものは、ここ数年来、身にしみて感じてきた、『遠野物語』の世界の消滅であった。いまや葬り去られようとしている畏怖畏敬の念が、人間の存在の根源につながるものとして、問い直されなければならないとする認識は、けっして私のひとりよがりではないはずである。

思うに、国語科の学習の大きなねらいの一つに、思考力・批判力を伸ばすことがあげられるであろう。日に日に複雑な様相を呈してきている現代社会の中にあって、生徒たちが、ものの見方や考え方を広げたり深めたりしていくことは、最も切実な課題であると言ってよい。そして、それらの力が、偏狭な日常生活と次元を異にする世界にふれることによって、いっそう豊かに培われていくというのであれば、わずか半世紀の間に、はるかかなたに遠のいてしまった『遠野物語』の世界は、国語科の学習において、真剣に取り上げられるべきテーマにちがいない。

ただし、この教材化の意図については、すでに、「国語教育研究第八一集」（昭和五四年二月、日本国語教育学会刊）において明らかにしたので、ここでは、教材化の実際を具体的に述べてみることにしたい。

二

『遠野物語』を実際に授業で取り扱うにあたって、私は、テキストに、岩波文庫の『遠野物語・山の人生』を選び、次のような指導計画を立てた。

第一次　『遠野物語』を読み、感想文を書く。〈課題〉

第二次　『遠野物語』の世界について、概括的に理解する。（二時間）

第三次　第三話～第八話を中心にして、山人や神隠しについて考える。（三時間）

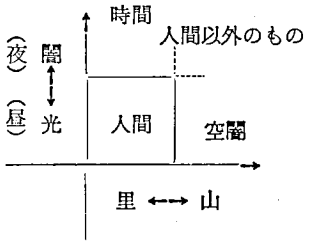
第四次　第五五話～第五八話を中心にして、川童や自然の精霊について考える。（二時間）

第五次　唐木順三の「おそれという感情」（注2）や、井上靖の「季節」（注3）を読み、畏怖畏敬の念を確かにする。（四時間）

第六次　第一〇話および第一八話を中心にして、予兆やザシキワラシについて考える。（二時間）

第七次　第三六話～第四二話を中心にして、人間と獣のかかわりについて考える。（三時間）

第一次における感想文は、「印象に残ったものを一〇話選び、それぞれにコメントを付す」というかたちで、夏休みの宿題として課した。授業に先立って、全部の話に目を通しておくことをねらったものである。第二次の概括的な説明は、私自身の体験（注4）を折りこみながら下に掲げた模式図の理解につとめた。すなわち、〃夜〃および〃山〃が人間以外のものの跳梁する世界であり、それらに対して、人間は、息をひそめ、感覚をとぎすましていたことのイメージ化を図ったのである。なお、第五次に、唐木順三と井上靖の文章を挿入したのは、ちょうどその時期が教育実習にあたることをも、配慮したためである。



したがって、実質的には、第三次・第四次・第六次・第七次の四つの観点から、常民の心的世界に迫っていったことになる。どの問題も、すぐにまとまった答えをみちびくことができないために、生徒たちはとまどい気味であったが、それでも授業が重なるにつれて、積極的に意見を出してきた。それには、吉本隆明の「村落共同体から離れたものは恐ろしい目にであい、きっと不幸になるという〈恐怖の共同性〉が象徴されている」（注4）や、谷川健一の「人間は山野に住む動物たちとの共存の場を失った。人間はもや山深い人生について知る手がかりを失った」（注5）などを引いて、視点が固定しないように心がけたのが、効果的であったと思われる。

いま、そのすべての時間について詳らかにする紙幅の余裕がないので、第三次および第七次を中心にして、その授業の実際を明らかにしていくことにする。

三

第三次の目標は、第三話―第八話をめぐって、「山人や神隠しに

ついて考え、遠野の人々の生活と〃心的世界〃を探る」ことにあった。

山人とは、常民社会から疎外された漂泊民のことであり、常民に注目するまでの柳田国男が、強い関心を寄せていた事象にほかならない。そのことは、『遠野物語』に先立って、明治四二年に書かれた「天狗の話」（注7）に、「日本の諸州の山中には明治の今日と雖も、まだ我々日本人と全然縁の無い一種の人類が住んで居る」とあり、さらに「これ等の深山には神武東征の以前から住んで居た蛮民が、我々のために排斥せられ窮追せられて漸くのことで遁げ籠り、新来の文明民に対しいふべからざる畏怖と憎悪とを抱いて一切の交通を断って居る者が大分居るらしいのである。」とつづいていることからも、容易に察しがつくであろう。また、大正一五年に刊行された『山の人生』（注8）は、山人の実態を全力をあげて追求しようとしたものと言っても、過言ではあるまい。

『遠野物語』には、山男・山女・天狗など、山人の話が数多く取り上げられているいる。そして、それらと関連して語られるのが、いわゆる〃神隠し〃である。すなわち、先に引いた「天狗の話」は、今日でも片田舎でよく聞く神隠しを山人の仕事としたあと、「彼等も人なり、生殖の願は強い内部の圧迫であらう。山中の孤独生涯に堪へ兼ねて、黄昏に人里へ来り美しい少年少女を提げて帰るのは、全く炭焼が酒買ひに来るのと同じである」と説明している。

ところで、三時間の授業の指導過程を掲げる前に、第三話～第八話の全文を引いておくことにする。

三　山々の奥には山人住めり。栃内村和野の佐々木嘉兵衛という人は今も七十余にて生存せり。この翁若かりしころ猟をして山奥に入りしに、遥かなる岩の上に美しき女一人ありて、長き黒髪を梳りていたり。顔の色きわめて白し。不敵の男なれば直に銃を差し向けて打ち放せしに弾に応じて倒れたり。そこに馳けつけて見れば、身のたけ高き女にて、解きたる黒髪はまたそのたけよりも長かりき。のちの験にせばやと思いてその髪をいささか切り取り、これを結ねて懐に入れ、やがて家路に向いしに、道の程にて耐えがたく睡眠を催しければ、しばらく物蔭に立寄りてまどろみたり。その間夢と現との境のようなる時に、これも丈の高き男一人近よりて懐中に手を差し入れ、かの結ねたる黒髪を取り返し立ち去ると見ればたちまち睡は覚めたり。山男なるべしといえり。

○土渕村大字栃内。

四　山口村の吉兵衛という家の主人、根子立という山に入り、笹を苅りて束となし担ぎて立上らんとする時、笹原の上を風の吹き渡るに心づきて見れば、奥の方なる林の中より若き女の稚児を負いたるが笹原の上を歩みて此方へ来るなり。きわめてあでやかなる女にて、これも長き黒髪を垂れたり。児を結いつけたる紐は藤の蔓にて、着たる衣類は世の常の縞物なれど、裾のあたりぼろぼろに破れたるを、いろいろの木の葉などを添えて綴りたり。足は地に着くとも覚えず。事もなげに此方に近より、男のすぐ前を通りて何方へか行き過ぎたり。この人はその折の怖ろしさより煩い始めて、久しく病みてありしが、近きころ亡せたり。

○土渕村大字山口、吉兵衛は代々の通称なればこの主人もまた吉兵衛ならん。

五　遠野郷より海岸の田ノ浜、吉利里吉などへ越ゆるには、昔より笛吹峠という山路あり。山口村より六角牛の方へ入り路のりも

近かりしかど、近年この峠を越ゆる者、山中にて必ず山男山女に出逢うより、誰もみな怖ろしがりて次第に往来も稀になりしかば、ついに別の路を境木峠という方に開き、和山を馬次場として今は此方ばかりを越ゆるようになれり。二里以上の迂路なり。

○山口は六角牛に登る山口なれば村の名となれるなり。

六　遠野郷にて豪農のことを今でも長者という。青笹村大字糠前の長者の娘、ふと物に取り隠されて年久しくなりしに、同じ村の何某という猟師、或る日山に入りて一人の女に遭う。怖ろしくなりてこれを撃たんとせし、何おじではないか、ぶつなという。驚きてよく見れば彼の長者がまな娘なり。何故にこんな処にはおるぞと問えば、或る物に取られて今はその妻なれり。子もあまた生みたれど、すべて夫が食い尽して一人此のごとくあり。おのれはこの地に一生涯を送ることなるべし。人にも言うな。御身も危うければ疾く帰れというままに、その在所をも問い明らめずして遁げ還れりという。

○糠の前は糠の森の前にある村なり、糠の森は諸国の糠塚と同じ。遠野郷にも糠森・糠塚多くあり。

七　上郷村の民家の娘、栗を拾いに山に入りたるまま帰り来たらず。家の者は死したるならんと思い、女のしたる枕を形代として葬式を執行い、さて二三年を過ぎたり。しかるにその村の者猟をして五葉山の腰のあたりに入りしに、大なる岩の蔽いかかりて岩窟のようになれるところにて、図らずこの女に逢いたり。互いに打ち驚き、いかにしてかかる山にはおるかと問えば、女の曰く、山に入りて恐ろしき人にさらわれ、こんなところに来たるなり。遁げて帰らんと思えど些の隙もなしとのことなり。その人はいかなり。その人はいかなる人かと問うに、自分には益の人間と見ゆれど、ただ丈きわめて高く眼の色少し凄しと思わる。子供も幾人か生みたれど、我に似ざれば我子にはあらずといいて食うにや殺すにや、みないずれへか持ち去りてしまうなりという。まことに我々と同じ人間かと押し返して問えば、衣類なども世の常なれど、ただ眼の色少しちがえり。一市間に一度か二度、同じような人四五人集まりきて、何事か話をなし、やがて何方へか出て行くなり。食物など外より持ち来たるを見れば町へも出ることならん。かく言ううちにも今にそこへ帰って来るかも知れずという故、猟師も怖ろしくなりて帰りたりといえり。二十年ばかりも以前のことかと思わる。

○一市間は遠野の町の市の日と次の市の日の間なり。月六度の市なれば一市間はすなわち五日のことなり。

八　黄昏に女や子供の家の外に出ている者はよく神隠しにあうことは他の国々と同じ。松崎村の寒戸というところの民家にて、若き娘梨の樹の下に草履を脱ぎ置きたるまま行方を知らずなり、三十年あまり過ぎたりしに、或る日親類知音の人々その家に集まりてありしところへ、きわめて老いさらぼいてその女帰り来たり。いかにして帰って来たかと問えば人々に逢いたかりし故帰りしなり。さらばまた行かんとて、再び跡を留めず行き失せたり。その日は風の烈しく吹く日なりき。されば遠野郷の人は、今でも風の騒がしき日には、今でも風の騒がしき日には、きょうはサムトの婆が帰って来そうな日なりという。

四

第三次の三時間の授業の指導過程は、次のようなものであった。

学習活動	指導上の留意点
第一時 一、第三話・第四話を通読する。 二、二つの話から、山人とかかわる場面をイメージ化する。 三、二つの話から、山人の特徴1（形体）をとらえる。 四、二つの話から、山人の特徴2（性情）をとらえる。 五、二つの話に共通する、山人に対する思いを考える。	・簡潔なひびきの高い文体に気づかせる。 ・遠くない過去であることや、〃山〃と〃里〃の区分を確かにする。 ・山人の由来についても、簡単にふれる。 ・「美しき女」（第三話）と「あでやかな女」（第四話）を軸にして、二つの話に共通した要素を取り出させる。 ・特に、〃身のたけ〃（第三話）〃着たる衣服〃（第四話）をふまえて、村の人との違いを見きわめさせる。 （〃差別〃につながることのないように十分に配慮する。） ・山男が髪を取り返した事由についての解釈を試みさせる。 ・「足は地に着くとも覚えず」から、山人の山野における挙動を想像させる。 ・「耐えがたく睡眠を催しければ」（第六話）と「その折の怖ろしさより煩い始めて」（第七話）の根底にあるものを探らせる。
第二時 一、第六話・第七話を通読する。 二、二つの話に共通した構成をとらえる。 三、前半部において、村の娘の失踪する原因をとらえる。 四、後半部において、山人の特徴を確かにする。 五、二つの話から、〃山の人	・第三話、第四話との相違点に着目させる。 ・山中における、失踪した娘との遭遇をもって、二分する。 ・「或る物に取られて」（第六話）、「恐ろしき人にさらわれ」（第七話）を中心にする。 〃神隠し〃に関する問題点も掘り起こしておく。 ・山に入った女の、二つの打ち明け話から、共通した要素を取り出させる。 ・特に、女や子供に対する、山人の態度についての解釈を試みさせる。 ・衣食性のほかに、「同じような人四五人集まりきりきて」の

生〃を想像してみる。

第三時

一、第八話を通読する。
二、話の構成をとらえる。
三、一般的説明において、黄昏と神隠しの関連を考える。
四、具体的事例において、神隠しにあった女の人生を想像する。
五、第話三〜第八話を通じて村の人と山人とのかかわりを考える。

観点からも探らせる。
・『山の人生』（一六深山の婚姻のこと）を活用する。
・第六話・第七話との相違点に着目させる。
・一般的説明と具体的事例に二分する。
・具体的事例の部分にあっては、三つの段階を図式にして示す。
・黄昏が、「タソカレ（誰そ彼）」であることを、「かはたれ時」〈注9〉によって押さえる。
・女や子供と神隠しの関連についても考える。
・『山の人生』（七町にも不思議なる迷子ありしこと）を活用する。
・「再び跡を留めず行き失せたり」の事由の解釈を中心にする。
・「風の烈しく吹く日」の意味にも注目させる。
・『山の人生』（一四ことに若き女のしばしば隠されしこと）を活用する。
・村の人と山人の生活圏の独立と交錯をふまえる。
・村落共同体からの離脱を、吉本隆明の『共同幻想論』によって確かにする。

第三次の、山人と神隠しを中心にした三時間の授業は、概してうまく運ばなかった。取り上げた項目の大半が、生徒たちの頭の上を素通りしていく感じであった。その最も大きな原因は、話の中心である山人の実体が、イメージ化できなかったことである。生徒たちは、たとえば、第三話に「身のたけ高き女にて、解きたる黒髪はまたそのたけよりも長かりき」とあり、第七話に「丈きわめて高く眼の色少し凄しと思わる」とある山人の存在を全くの作り話とは受けとめないにしても、そっくりそのまま肯んずるわけにいかなかったのであろう。したがって、強いてそのことにこだわると、おのずと『遠野物語』の本文から離れて、『山の人生』をふまえた説明に陥ることになったのである。その点では、むしろ、実在問題にとらわれることの少ない、川童や自然の精霊を先に学習するほうが、適切であったのかもしれない。

しかしながら、かっての遠野の人たちが、〃山〃に対して強い畏怖心を抱いていたことについては、漠然とではあっても、実感することができたと思われる。とりわけ、第三時に取り扱った第八話においては、黄昏をタソカレ（誰そ彼）ドキ」と言って、見知らぬ人を警戒していたことを、あらためてかみしめることになった。井上靖が「季節」というエッセイで、「小学校へ上がるようになると、夕暮というものは、淋しさと怖ろしさの入り混じったものとして感じられてくる。村の辻々で遊んでいた子供たちも、ふいに夕暮が来

ていることに気付くと、家に向って駈け出して行く。一人が駈け出すと、他の子供たちも次々に駈け出して行く。駈け出すと同時に、夕暮の淋しさ怖ろしさが四辺から押し寄せて来る」と述べている、一種の原始感覚に思い当たったからにちがいない。

五

第七次の目標は、第三六話～第四二話話をめぐって、「人間と狼のかかわりについて考え、遠野の人々の生活と〃心的世界〃を探る」ことにあった。

『遠野物語』に出てくる野生の動物の中で、最も多く語られるのが狼であり、第三六話から第四二話まで、連続して七つの話が述べられている。それは、狼という語が、もともと大神に由来すると言われるように、狼を山の神、または神の使いとして畏敬していたからにほかならない。各地に、狼の仔が生まれた場合、出産見舞に団子や餅をもって行く風習が残っていたのは、そのためである。狼が人間にあまり危害を加えない上に、田畑を荒す鹿や猪を捕食することが、農耕に従事する人たちに重んじられたのであろう。

しかし、この狼は、明治三〇年代をもって絶滅したというのが定説になっている。そして、そのことは、『遠野物語』の第四一話が、「そのころより遠野郷には狼甚だ少なくなれりとのことなり」と結ばれていることとも符合するのである。犬類の伝染病ジステンバーの流行が、集団生活をする狼にとって致命的であったと言われるが、いずれにしても、日清戦争ごろから起った日本資本主義文明は、山を切り開き、谷を埋めて、山野に住む動物たちとの共存の場を失わしめたのである。太古にままでさかのぼることのできる、人間と野生の動物との交渉史には、もはや終止符が打たれたのであろうか。

ところで、三時間の授業の指導過程を掲げる前に、第三六話～第四二話の全文を引いておくことにする。

三六 猿の経立、御犬の経立は恐ろしきものなり。御犬とは狼のことなり。山口の村に近き二ツ石山は岩山なり。ある雨の日、小学校より帰る子どもこの山を見るに処々の岩の上に御犬うずくまりてあり。やがて首を下より押しあぐるようにしてかわるがわる吠えたり。正面より見れば生まれ立ての馬の子ほどに見ゆ。後から見れば存外小さしといえり。御犬のうなる声ほど物凄く恐ろしきものはなし。

三七 境木峠と和山峠との間にて、昔は駄賃馬を追う者、しばしば狼に逢いたりき。馬方らは夜行には、たいてい十人ばかりも群をなし、その一人が牽く馬は一端綱とてたいてい五六七匹までなれば、常に四五十匹の馬の数なり。ある時二三百ばかりの狼追い来たり、その足音山もどよむばかりなれば、あまりの恐ろしさに馬も人も一所に集まりて、そのめぐりに火を焼きてこれを防ぎたり。されどなおその火を躍り越えて入り来るにより、ついには馬の綱を解きこれを張り回らせしに、犇などなりとや思いけん、それよりのちは中に飛び入らず。遠くより取り囲みて夜の明るまで吠えてありきとぞ。

三八 小友村の旧家の主人にて今も生存せる某爺という人、町より帰りに頻に御犬の吠ゆるを聞きて、酒に酔いたればおのれもまたその声をまねたりしに、狼も吠えながら跡より来るようなり。恐ろしくなりて急ぎ家に帰り入り、門の戸を堅く鎖して打ち潜みたれども、夜通し狼の家をめぐりて吠ゆる声やまず。夜明けて見れば、

馬屋の土台の下を掘り穿ちて中に入り、馬の七頭ありしをことごとく食い殺していたり。この家はそのころより産やや傾きたりとのことなり。

三九 佐々木君幼きころ、祖父と二人にて山より帰りしに、村に近き谷川の岸の上に、大なる鹿の倒れてあるを見たり。横腹は破れ、段されて間もなきにや、そこよりはまだ湯気立てり。祖父の曰く、これは狼が食いたるなり。この皮ほしけれど御犬は心ずどこかこの近所に隠れて見ておるに相違なければ、取ることができぬといえり。

四〇 草の長さ三寸あれば狼は身を隠すといえり。草木の色のの移り行くにつれて、狼の毛の色も季節ごとに変りて行くものなり。

四一 和野の佐々木嘉兵衛、或る年境木越の大谷地へ狩にゆきたり。死助の方より走れる原なり。秋の暮のことにて木の葉は散り尽し山もあらわなり。向うの峯より何百とも知れぬ狼此方へ群れて走りくるを見て恐ろしさに堪えず、樹の梢に上りてありしに、その樹の下を駆しき足音して走り過ぎ北の方へ行けり。そのころより遠野郷には狼甚だ少なくなれりとのことなり。

四二 六角牛山の麓にオバヤ、板小屋などいうところあり。広き萱山なり。村々より苅りに行く。ある年の秋飯豊村の者ども萱を苅るとて、岩穴の中より狼の子三匹を見出し、その二つを殺し一つを持ち帰りしに、その日より狼の飯豊衆の馬を襲うことやまず。外の村々の人馬にはいささかも害をなさず。飯豊衆相談して狼狩をなす。その中には相撲を取り平生力自慢の者あり。さて野に出でて見るに雄の狼は遠くにおりて来たらず。雌狼一つ鉄という男に飛びかかりたるを、ワツポロを脱ぎて腕に巻き、やにわにその狼の口の中に突き込みしに、狼これを噛む。なお強く突き入れながら人を喚ぶに、誰も誰も怖れて近よらず。その間に鉄の腕は狼の腹まで入り狼は苦しまぎれに鉄の腕骨を噛み砕きたり。狼はその場にて死したれども、鉄も担がれて帰り程なく死したり。

○ワツポロは上羽織のことなり。

六

第七次の三時間の授業の指導過程は、次のようなものであった。

学習活動	指導上の留意点
第一時	
一、第三六話・第三七話を通読する。	・簡潔なひびきの高い文体に気づかせる。
二、二つの話から、狼とかかわる場面をイメージ化する。	・遠くない過去であることや、生活と深く結びついていることを理解させる。 ・狼の絶滅についても、簡単にふれる。
三、第三六話を中心にして、狼の特徴1（形体）をとらえる。	・「正面より」と「後から」の対応を手がかりにする。 ・観察力の細かさに注目させる。
四、第三七話を中心にして、	・「火を躍り越えて入り来る、」「中に飛び入らず」、「神の明

狼の特徴2（性情）をとらえる。

五、二つの話に共通する、狼に対する思いを考える。

第二時

一、第三八話を通読する。

二、話の構成をとらえる。

三、問題点A（「声をまねる」と「食い殺される」の関係）を考える。

四、問題点B（「食い殺される」と「産傾く」の関係）を考える。

五、問題点A・Bの根底に潜む、ものの考え方をとらえる。

第三時

一、第四二話を通読する。

二、話の構成をとらえる。

三、前半部において、狼狩に至る過程をとらえる。

四、後半部において、雌狼と鉄の戦いぶりをとらえる。

五、第三六話〜第四二話を通じて、人間と狼のかかわりを考える。

るまで吠えてありき」の三点を押さえる。

・特に、「中に飛び入らず」が、一つの判断にもとづいていることを確かにさせる。

・「物凄く恐ろしきもの」（第三六話）と「あまりの恐ろしさ」（三七話）の根底にあるものを探らせる。

・第三七話との相違点に着目させる。

・三つの段階を、図式にして示し、問題点A・Bを浮き彫りにする。

・馬が食い殺される場面を、イメージ化させる。

・狼の行為が、仕返しであることを明確にする。また、何に対する仕返しかを探らせる。

・「声をまねる」と「産傾く」の関係を重ねる。

・「酒に酔いたれば」から、禁忌（タブー）についてもふれる。

・いままでの学習に共通する、人間以外のものの世界を認識させる。

・できれば、第三九話によって確かにする。

・第三八話との相違点に着目させる。

・雌狼との鉄の登場をもって、二分する。

・村の生活における、萱を刈ることの意味にふれる。

・「飯豊衆の馬」だけを襲う、狼の〝識別力〟を浮き彫りにする。

・両者の死におよぶ、戦いの壮絶さを実感させる。

・雄狼の「遠くにありて来たらず」の働きも重ねて考える。

・人間と狼の生活圏の独立と交錯をふまえる。

・太古以来の人間と野生動物の交渉を、谷川健一の『神・人間・動物』によって確かにする。

第七次の人間と狼のかかわりを中心にした三時間の授業は、第三次、あるいは、第四、第六次に比べて、概してうまく運んだ。たとえば、公開授業にあたった第二時においては、生徒たちの読みが深

まっていく場面を展開することができた。すなわち、狼の鳴き声をまねるという行為が、狼の尊厳を傷つけたことになり、さらにその背後にあっては、狼に対する畏怖畏敬念の冒瀆であることを、探り当てたのである。このように、狼をめぐっての話が、生徒たちの心に浸透していった最も大きな原因は、山人・神・川童・ザシキワラシなどよりも、そのイメージ化が容易であったせいである。また、各時間に、ポイントを押さえた問題点を明確に設定したのも、効果的であったと思われる。

しかし、逆に言えば、狼の実体がはっきりしていればいるだけに、動物学的な立場で読んでいく傾きも生じやすかった。たとえば、第三八話にあって、「馬の七頭ありしをことごとく食い殺していたり」という部分を、単なる狼の習性として解釈してしまうのである。そして、狼に報復の意思がなかったことと、遠野の人たちがその行為を報復と受けとめたこととを混同するのである。桑原武夫は、「『遠野物語』から（注10）の中で、「幾百年の昔から長らく人間の間に伝わり来ったことには、何かそれだけの深い人間的意味がなくてはならない。科学知識などというが、じつは常識にすぎぬところのものによって解釈のつかぬものは何でも棄て去ろうとするのは、精神の怠慢であり、人間性への不親切にほかならい。」と述べているが、自然は、人間によってたやすく解明し尽くされるほど、浅薄なものではないであろう。科学の発達が、人間に多くの恩恵を与えてきたことは確かであっても、もしそのことをもって、自然のすべてを征服したと考えるのは、いささか傲慢であることに思いあたらなければなるまい。

六

ここで、公開授業にあたった。第七次の第二時、つまり通算第一五時間目の授業を、板書とともに、少しく具体的に示しておきたい。（本文中に一線を付したのは、板書に取り上げた字句である。）

＊　＊　＊

本時の学習目標をあきらかにする。

『遠野物語』をつづけて勉強します。〔三六〕～〔四二〕は、一連の狼の話ですが、今日は、特に〔三八〕を取り上げます。

かって、人間と狼がどのようにかかわっていたのかを読みとり、そこからわれわれ現代人が失わんとしている、あるいは、すでに失ってしまった、生き方や考え方を探ってみることにします。

一、第三八話を通読する。

それでは、はじめに一回読んでみましょう。前の時間に勉強した〔三七〕と比べて、どういう点が似ているか、ちがっているかに注意してください。

（通読する。）

二、話の構成をとらえる。

〔三七〕は、駄賃馬を追う馬方を中心にしていましたが、〔三八〕は、小友村の旧家の主人をめぐっての話です。

また、ともに、人間と狼の話にかわりませんが、〔三七〕が、人間も狼も複数であったのに対し、〔三八〕は、一人と一匹です。

ほかに、二つの話を比べて、話の展開上、どういう点がちがっていますか。

（二人に指名する。）

いろいろな点が指摘されましたが、〔三八〕が〔三七〕に比べて新しい要素は、次の三点でしょう。

第一は、人間のほうからの働きかけがあることです。すなわち、小友村の旧家の主人が、狼の吠える声の鳴きまねをしていることです。

第二は、それに対して、狼が馬を七頭食い殺すという行動をしていることです。〔三七〕でも、追っかけて来て、夜の明けるまで吠えていますが、被害はしるしてありませんでした。

第三は、さらに、その結果として、産やや傾くとしるしてあることです。

ここで、大きく二つの問題点が浮き彫りにされてきます。

一つは、「声をまねる」ことと「食い殺す」ことの関係です。問題点Aとしておきます。

もう一つは、「食い殺す」ことと「産が傾く」ことの関係です。問題点Bとしておきます。

この時間は、この二つの問題点を考えていくことになります。

三　問題点Aを考える。

それでは、問題点Aを考えますが、まず、狼が馬を食い殺した個所をふまえて、狼についてどんなことがわかるかを確かにしておくことにします。

〔三七〕でも、執拗さとか賢さとかとかが指摘されましたが、その点はどうですか。

（一人に指名する。）そうです。

「夜通し狼の家をめぐりて吠ゆる声やまず」とあることから、やはり執拗です。また、「馬屋の土台の下を掘り穿ちて」とあるから、やはり知恵があります。

なお余談ですが、私の田舎などでは、狐が鶏を盗むとき、同じように土台の下を掘ってしのびこみました。狼と狐が、こういった話によく登場するのも、知恵の働く点が一つの要素になっていると思います。

ほかには、どういうことがわかりますか。

（二人に指名する。）

そう、「馬の七頭ありしをことごとく食い殺してけり」とあることから、強暴さがわかります。馬を殺せるのは、日本では、ほかに熊ぐらいなものでしょう。

しかし、馬を七頭食い殺したことについてもっ大切なのは、単に食べるためではないということです。

これは、ある意思に基づいた行動であることを示しています。しかも、気まぐれではなく、声をまねたことへの仕返しなのです。つまり、はっきりした報復です。

それでは、ここで、もとの問題にかえって、「声をまねる」ことが、どうして報復に価するのか考えてみてください。

（二人に指名する。しばらく話し会う。）

いろいろな意見が出されましたが、一言で言えば、ばかにしたことになるからです。侮辱です。

〃まねる〃という行為は、にせものが本物とよく似た行為をすることです。狼が、その鳴き声に誇りをもっていると考えれば、その尊厳を傷つけたことになり、さらに、それが、「酒に酔いたれば」とあるように、興味本位からかいから出たとなれば、なおさらです。

四　問題点Bを考える。

それでは、問題点Bを考えることにします。食い殺されたことと

産が傾くことが、どのようにつながっているかの問題です。

馬は、当時の大きな財産ですから、七頭も殺されたということは、かなりの損害ですが、ただ物質的なことだけではないはずです。だから、この問題は、「声をまねる」ことと産の傾くことのつながりで考えていかなくてはなりません。

だれか説明できますか。

（二名に指名する。）

ちょっとむずかしいようですが、もう一度「酒に酔いたれば」に注目してください。

さっきは、からかいというようにしましたが、もっと深く探ると、普通の精神状態でないことを意味しているのです。つまり、してはならないこと、禁忌（タブー）を破ったことになるのです。単なるからかいではなく、冒瀆にあたるのです。

五　問題点A・Bの根底に潜む、ものの考え方をとらえる。

禁忌を破ったから産が傾いたというとらえかたの根底に、遠野の人たちの、われわれの祖先の、どういうものの考えかたが横たわっているかわかりますか。

（少し間をおく。）

冒瀆というのは、神聖なものをけがすことです。これは、別の世界を想定していることにつながります。

つまり、遠野の人たちに代表されるわれわれの祖先、それも、つい三代か四代前の人たちは、人間の世界とは別に、狼（野生の動物）の世界を意識していたのです。われわれは、現代、科学の名のもとに、すべてのものを人間が支配していると考えていますが、人間以外のものの世界を認めていたのです。ここに、敵対が生じ、共感が

〈最終的な板書〉

遠野物語

〔三八〕

人間（小友村の旧家の主人）〈一人〉

狼〈一匹〉

①酒に酔いたれば

①声をまねる

侮辱 からかい

A

B′

禁忌を破る＝冒瀆

畏怖感

B

③産傾く

〔別の世界〕

②

○夜通し吠ゆる〈執拗〉

○土台の下を掘る〈知恵〉

○馬七頭食い殺す〈強暴〉〈意思〉

報復

生じ、何よりも畏怖の念が生じていたのです。

〔三九〕にも、実は、そのことがよく表れています。読む時間がありませんが、大きな鹿が倒れていても、その皮を取ることができないというのは、それが狼の世界に属するものだという認識にほかなりません。

六　本時のまとめと次時の予告をする。

われわれが、現在、声をまねることと産の傾くことを結びつけて考えることができにくいのは、狼の世界を、人間以外のものの世界として認識し得ないからです。

人間が太古以来もちつづけてきた、野生の動物との交渉史は、絶えてしまったということかもしれません。

終わりのほうは、少し結論をいそいだようですが、次の時間は、〔四二〕を読んで、さらにこの問題を考えてみることにします。

それでは、以上で今日の勉強は終わりです。

七

それにしても、一六時間、二か月半にわたった『遠野物語』の授業に対する、生徒たちの反応は多様である。いま、それを便宜的に三つのパターンに分けてみるとして、その一つは、「『遠野物語』――それは日本の心、日本人の原点。それがわかった時、私は自分自身が新鮮な感動に包まれるのを感じた」という、あふれるばかりの共感である。また、もう一つの極にあるのは、「常に事実と幻想の混在という壁があって、物語の深い読みとりを受けつけようとしなかった」とする、ためらいにも似た拒絶である。

そして、この二つの間にあって、大半の生徒は、「夏休みの宿題しとて、はじめて読んだ時には、何が何だかさっぱりわからず、感想を書くのに苦労しました。もちろん、今でもはっきりとはわかりませんが、それでも授業を受けてきて、淡々と書かれた文章に、その当時の遠野の人々の生活や心があらわれていることを知りました。なんとなく読みすごしてしまいそうなところに、土のにおいのする素朴な心がかかわっていることには、ほんとうにびっくりしました」と、その学習の成果を、率直にふりかえっている。常民の世界とは何であったのか、それが日本の民衆の心から消えていくことは何を意味するのかを問いかける『遠野物語』は、生徒たちの心をはげしく揺り動かす教材であると言わなければなるまい。

（昭和五四年三月二五日稿）

注1　日本民俗文化大系1『柳田国男』（昭和五三年、講談社刊）の一節。

注2　『日本の心』（昭和四〇年、筑摩書房刊）所収。三省堂「新版現代国語1」に採録。

注3　『幼き日のこと』（昭和四八年、毎日新聞社刊）所収。光村図書「中等新国語3」に採録。

注4　夜おそく一人で母屋から離れた便所に行ったとき、ことさら大きく咳ばらいをしたり、昼でも一人で山奥く深くたきぎを取りに行ったとき、ことさら大きく歌を歌ったりしたのが、辺りを徘徊する妖怪にむかって、どうぞぶつからないでもらいたいという懇願であったかもしれないこと。

注5　『共同幻想論』（昭和四三年、河出書房新社刊）の一節。

注6　『神・人間・動物』（昭和五〇年、平凡社刊）の一節。

注7　『妖怪談義』（昭和三一年、修道社刊）所収。

注8　大正一四年一月～八月、アサヒグラフに連載したものを基

にして増補。

注9　『妖怪談義』所収。

注10　「文学界」（昭和一二年七月号）所収。

（広島大学附属高校教諭）